

○ 高橋淳子*、中沢文子**

(*聖セシリア女短大、**共立女大)

目的 食品の破碎音を表現するのに欧米では主に crispness と crunchiness の2つの語彙が用いられる。一方、日本では食品の破碎音を表現するのに擬声語が用いられる。しかし、各食品に対する擬声語の使われ方は明確ではない。そこで本研究では破碎性食品の破碎音を表現するのにどのような特徴的な擬声語が使われているかを明らかにすることを目的とした。

方法 20代の女性123名を対象に実際に破碎性食品を試食してもらい、そのときに生じた破碎音を表現する擬声語を提示した擬声語の中から選んでもらう。破碎性食品はたくあん、生大根、生人参、レタス、せんべい、コーン系スナック、ビスケットである。始めに口を開けて食品を前歯で噛み切るときを咀嚼1回目とし、次にその噛み切った食品を口の中に入れて、口を閉じ奥歯で咀嚼するときを咀嚼2回目以降とし、各々の場合について擬声語を調べた。これらの結果を数量化Ⅲ類の統計手法を用いて解析した。

結果 咀嚼1回目と咀嚼2回目以降の場合において各食品の破碎音を表現する特徴的な擬声語が得られた。これらの結果を数量化Ⅲ類を用いて解析すると、食品の破碎音を表現する擬声語は咀嚼2回目以降の場合、生野菜の破碎音を表現する“しゃきしゃき、こりこり、ぽりぽり、かりかり”と菓子類の破碎音を表現する“ぽりぽり、ざくざく、さくさく、ぱりぱり、ぽりぽり”に分けることができた。